

2025 年度 一 般 選 抜 （前 期） 2 月 1 日

国 語

〈注意事項〉

- 1 解答はじめの合図があるまでは、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 問題は1ページから14ページまでです。
- 3 監督者の指示に従い、解答用紙に次の事項を記入し、マークしてください。

記入，マークするときは黒鉛筆（H，F，HBに限る）を使用し，誤ってマークした場合は消しゴムでていねいに消し，新たにマークし直してください。

- ①解答用紙の氏名・受験番号欄に「氏名」「受験番号」を記入し，受験番号マーク欄にマークしてください。

※記入例（受験番号 410324 の場合）

氏 名	科 学 大					
受験番号	①	②	③	④	⑤	⑥
	4	1	0	3	2	4

受験番号 マーク欄	①	0	1	2	3	<input checked="" type="radio"/>	5	6	7	8	9
	②	0	<input checked="" type="radio"/>	2	3	4	5	6	7	8	9
	③	<input checked="" type="radio"/>	1	2	3	4	5	6	7	8	9
	④	0	1	2	<input checked="" type="radio"/>	4	5	6	7	8	9
	⑤	0	1	<input checked="" type="radio"/>	3	4	5	6	7	8	9
	⑥	0	1	2	3	<input checked="" type="radio"/>	5	6	7	8	9

- ②入試区分欄の「一般前期（2/1）」をマークしてください。

入試区分	<input checked="" type="radio"/> 一般前期 (2/1)
教 科	<input checked="" type="radio"/> 国語 09

- ③解答用紙は折り曲げたり，汚したりしないでください。
- ④解答用紙は，表面がマーク式の解答欄，裏面が記述式の解答欄になっています。
- 4 問題冊子は持ち帰ってください。

問題一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

近代以前においては、文字で書かれることばは、日常生活で話すことばとは全くちがっていることが多かった。朝鮮では十五世紀にハングルが作られる以前、書きことばはすべて漢文という外国語であった。ヨーロッパではルネサンス以来、イタリアの詩人たちが「ゾクゴ」⁽¹⁾すなわち、かれらの日常の母語で書く以前には、「書く」とはラテン語で書くことであった。もともと、ことばと文字とは一体になっていて、切りはなすことができなかった。それぞれの文字は、それぞれのことばにふさわしく作られているのであるから、自分のことばのためには、そのための特別の改造を加えなければならなかった。他国の言語を書くための文字を、自分のことばに合わせて作りかえるという長い困難な努力のすえ、自分の母語に文字がカク⁽²⁾トクされ、とにかく、自分のことばで考えたことを、自分の文字でうつせばいいようになった。ふつうの人が自分で話していることばとは、もちろんオトことばである。ちようど、こどもが口で発音しながら、一字一字をそれにあてて書いている、あの姿である。(イ)

十九世紀のヨーロッパの政治の流れは、「民族自決」ということばで理解される。それは固有の、独自のことばを持っている民族は、自分たちを支配している異族の国家から分離して、独立の国家を形成する権利があるという思想にたっているが、そのことを可能にするのは、日常のことばが、国民のすべてに読み書きできるようになることによって、真の国民ができているということである。近代言語学の中で、音韻論^{*}という領域は、極めて重要な、中心的位置を占めているが、それは、新しく生まれた母語による国語を、その話し手のすべての人が、自分の口から出てきたオトにしたがって、話すのと同じくらいに自然に書けるための原理を打ちたてるといふ目的に応ずるものであったからだ。(ロ)

プラーグ学派の音韻論の研究者たちがカン⁽³⁾ケツなことばでその原理を述べているように、文字は個人的なものではなく、すべての人たちのものであるから、できるだけ書きやすく、読みやすいものでなければならなかった。そのためには、ちようどことばを話すときに、話し手はいちいち規則を意識しないのと同様に、できるだけ少ない約束ごとによって、言いかえれば、できるだけ別あつらえの規則を用いないでも、書けるという条件にあつていなければならない。

A こうした理想を、たとえば日本の書きことばの現実とつき合わせてみると、大きなへだたりがあることに気づく。ヨーロッパでは、文字で書き表わす単位は、それぞれの言語に定まっている、三十前後の有限個のフォネム^{*}(音韻、音素)と呼ばれるものであるから、必要な文字もその程度ですむ。しかし、漢字という、基本的には意味のための文字は、存在し、また存在し得る意味のための、その個数だけの文字を作らねばならない。ところで、意味の単位はあらかじめきまっているのではなく、文明の発達によって、新しい文化や技術が、加速度的に新しい意味を作り出す。こうして、五万もの文字がチク⁽⁴⁾セキされたというが、しかしまだま

だ足りないものであって、絶えず変化していく社会の要求に応ずるためには、理論的には無限の文字が必要となるのである。普通の人間が実際にクシ⁽⁵⁾できる文字は二、三千だとしても、しかし、心に浮かんだことばを、流れるように、ほとんど話すと同じように自然に、自動的に文字に写すというのはなかなか困難な作業である。(ハ)

日本人は、この漢字のくびきから自由になろうとして、さまざまな、度重なる努力を試みてきたが、その努力はむだであつただけでなく、間違つていたと思われはじめている。最近にいたつて、漢字^Bは呪いではなく、福音だと説かれるようになった。それは、日本の経済的繁栄によつて、学校教育が普及し、人々が、文字を学ぶ時間を十分に持つようになったこと、それに、自分で文字を書かなくても、機械が書いてくれるようになったことと直接の関係がある。しかし、もっと重要な論拠として、言語にとつての目的は意味を伝えることであつて、オトはその手段でしかない。だからオトを表わすアルファベット文字は、かえつてまわりくどいものであり、ずばり意味そのものを表わす漢字の方が、ことばの性質にあつていると説かれることがある。(二)

この問題提起はたいへんおもしろい。私は数年前、イヴァン・イリツチという人と、「リテラシイ」(文字生活)の出現の前後では、人間の社会とのかかわりにおけることばの意義がどのように変わつてきたかという問題で議論をした。その時私は、同じ「リテラシイ」と言つても、アルファベット世界と漢字世界とでは、質的なちがひがあると述べた。私はその時に「馬」という字を示し、また短い漢文の例を出して、世界中の言語が漢文で書くことができること(なぜなら漢文のオトはそれぞれ自分の母語で読んにおいて、意味さえ理解すればいいのだから)、また、世界中の四、五千もある言語で、異なつた四、五千もの単語、たとえばプフェールト、ホース、シュヴァール、コーニなどと言うかわりに「馬」という一字を示すことによつて人々は理解しあえることができる⁽⁶⁾と話した。漢文と漢字こそは、これからの宇宙時代にまったくふさわしいではないかと。それに「馬」という字は、それが指す動物へのカンキリ⁽⁶⁾ヨクにもたいへんすぐれていると説明した。イリツチ氏は、この字がすっかり気に入つて、黒板に書いた私のへたな字を消さないでほしいと言つてから、あかず眺めていたのである。(ホ)

以上のような考察から、私は、世界で、国際的に「識字運動」と一つのことばでよばれている運動でも、そこには二種類^Cのものを区別しなければならないと考える。識字運動の対象になる人たちは、ヨーロッパ語では「アナルフアベート」すなわち、直訳すれば「アルファベートなし」「アルファベートしらず」ということになるが、それは、普通そう訳されることになっている「文盲」^{*}とはかなりちがう。

アルファベートとは、ギリシャ文字のはじめの二文字 α 、 β をアルファ、ベータと順序にしたがつて読んだかたちである。ロシア文字も、同様にして、アーズ、ブーカと読んだのが、この文字の名前になつてゐる。このでんでいくと、日本語のアルファベートは「イロハ」である。では、日本語ではアルファベートと同様に、「イロハ」を知つていれば、有識字者であつて、文盲でないか

といえはそうはいかない。ヨーロッパ式に言えば、決して文盲ではないが、日本社会では半文盲に近いのだ。「イロハ」だけでは安全に道を歩くための文字はおろか、新聞さえも読むことはできない。だから、「イロハしり」は半文盲あるいは準文盲と呼ぶことになるだろう。

このことをよりよく理解するためには、「イロハ」がもともとない中国語のことを考えてみなければならぬ。日本では、一年生で十分に書ける日記が、中国では、そうはいかない。口をついて出てくるオトを、その流れにそって、書きしるす文字がないからである。話すことばを、それと同じくらいの自然さで、できるだけ少ない規則で書き表わすという道具がないからである。中国における文盲の克服には、アルファベット言語の場合の数倍以上もの時間と忍耐が必要となる。こうした社会における知識は、イロハ社会の知識に比べればはるかに権威主義的で抑圧的になってもふしぎではない。

私たちの多くは、さいわいにして、こどもの時から、ほとんど毎日のように、漢字をおぼえ、正しく書くことに骨身をけずるような思いをしてきた結果、これで何とかやっていける。大学で勉強してもまだまだつまずきが多いのではあるが。しかし、そうは言っても私たちはそれに慣れていて、しかるべきところが、期待される漢字で書いてないと落ちつきが悪いというほどの段階にまで到達している。それは生涯を通じての荒行のたまものである。

しかし問題は、成人してしまったおとなが、この文字をゼロから学ぼうとしたばあいにはどうだろうか。日本で暮らす必要のない外国人にとっては、あえて変わった趣味をえらぶ必要はない。しかし、どうしてもこれから日本で暮らしていかなければならない成人した外国人、さらに、何かの理由で、こどもの時に、文字を学ぶのに必要な、気の遠くなるような時間をそれについてやすことのできなかった人たちにとって、この文字がはかり知れない苦痛を与えていることは知るべきである。

田中克彦『ことばのエコロジー』

(注) *音韻論……言語の音声の機能を研究する学問。

*プラグ学派……一九二〇年代チェコスロバキアのプラハを中心に集まった言語学者の集団。音韻論を中心とした言語機能の研究を推進した。

*フォネム……音素。言語の音声の最小の単位。

*イヴァン・イリッチ……一九二六―二〇〇二。オーストリア生まれの哲学者、社会評論家。

*文盲……読み書きができないこと。また、その人。

問一 傍線部(1)～(6)と同じ漢字を使うものはどれか。それぞれ最も適当なものを、次の各群から一つ選びなさい。

(1) ゾクゴ

- ① カゾクで旅行に行く。
- ② 運動部にシヨゾクする。
- ③ 民間のフウゾクを研究する。
- ④ カイゾクが主人公の物語。
- ⑤ 事件がゾクハツする。

(4) チクセキ

- ① 自宅をカイチクする。
- ② ガンチクのある言葉。
- ③ 状況をチクイチ報告する。
- ④ チクサンギヨウに従事する。
- ⑤ ハチクの勢いで決勝まで進む。

(2) カクトク

- ① 本を返却するようトクソクする。
- ② 彼にはジントクがある。
- ③ 私のトクギはサッカーだ。
- ④ 雑誌にトクメイで投稿する。
- ⑤ 英語がトクイ科目だ。

(5) クシ

- ① 彼の意見をシジする。
- ② シヨシを貫く。
- ③ 高名な画家をシショウと仰ぐ。
- ④ 自分の権利をコウシする。
- ⑤ 部活で学生をシドウする。

(3) カンケツ

- ① カンソな造りの家。
- ② 彼女は鋭敏なゴカンの持ち主だ。
- ③ 会計カンサが入る。
- ④ その言動はカンカできない。
- ⑤ 彼の演技はアツカンだった。

(6) カンキリヨク

- ① ブンドキで測る。
- ② 号令とともにキリツする。
- ③ キブン転換をする。
- ④ キカン限定の商品。
- ⑤ キネン行事に参加する。

問二 本文からは次の一段落が抜けている。元の場所に戻す場合、(イ)～(ホ)のどこに入るか。最も適当なものを、①～⑤の中から一つ選びなさい。

しかも、それらの文字が、相互に関連なく、すべてが別あつらえの知識として、記憶のなかに無秩序に押しこんであるとするならば、書き手の作業はたえまなくつまずき、とても話すのにあわせて「流れるように」とはいかない。

- ① (イ) ② (ロ) ③ (ハ) ④ (ニ) ⑤ (ホ)

問三 傍線部A「こうした理想を、たとえば日本の書きことばの現実とつき合わせてみると、大きなへだたりがある」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 日常のことばを自国の文字で読み書きできることが民族の独立を意味したヨーロッパに対し、日本はもともと独立国で独自の文字を発展させてきたということ。
- ② それぞれ独自のことばを持っていることを理想とするヨーロッパの諸国家と比較して、漢字を移入して活用してきた日本語は独自のことばとは言えないということ。
- ③ 漢字の他に表音文字である仮名まで使用しなければならぬ日本語は、わずか三十前後の文字ですべてを表現できるヨーロッパ言語とは大きく性質が異なっているということ。
- ④ 意味の数だけ無限に文字が存在し得る漢字を用いる日本語では、口から出てきたオトをそのまま文字で書き表すという近代言語学の理想は現実的ではないということ。
- ⑤ できるだけ少ない約束ごとで書くことができることが近代言語の理想であるが、日本語では文字で書かれることばは約束ごとが複雑で例外が多く難解であるということ。

問四 傍線部B「漢字は呪いではなく、福音だと説かれるようになった」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 変化する社会の要求に応じて無限に増殖しうる漢字を使用する困難を、日本人は努力を積み重ね、科学技術を発展させることで克服したと認められるようになったということ。
- ② 膨大な量の学習時間が求められる漢字のもつデメリットを克服できるほど、日本は経済的にも科学技術的にも発展した社会であると世界から認識されるようになったということ。
- ③ これからの宇宙時代においては、アルファベットよりもむしろ漢字を用いた方が世界中のさまざまな人のコミュニケーションが円滑になると評価されるようになったということ。
- ④ 日本語においてはアルファベットと同じ音を表現する機能を持つ「イロハ」を生み出したことが、漢字学習が強い困難からの解放につながったと説明されるようになったということ。
- ⑤ 新しい文化や技術が加速度的に新しい意味を作り出す世界において、漢字が意味を表す文字であることは、ことば本来の性質に適っていると考えられるようになったということ。

問五 傍線部C「二種類のことを区別しなければならない」とあるが、それはなぜか。七十字以内で説明しなさい。ただし、句読点、記号も字数に含む。

問六 傍線部D「こうした社会における知識は、イロハ社会の知識に比べればはるかに権威主義的で抑圧的になってもふしぎでは

ない」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 表音文字を持たない社会では、文字の知識がなければ自分の口から出てくる音を書き表すこともできず、文字を学ぶ機会のなかった人にとっては、その社会で生きることが苦痛を伴ったものとなるということ。
- ② 漢字だけを使用する社会では、国家権力が国民との意思疎通をはかるために人々に骨身をけずって漢字を学習させ、正しく書けるようになることを強い、国民に大きな負担や苦痛を強いているということ。
- ③ 漢字だけで言いたいことを表現できる中国語話者は、表音文字であるイロハも使用しなければならない日本語話者に対して、漢字の知識量において優位な立場にあり、文化的に圧倒してきたということ。
- ④ もともと漢字を中国から移入して使用してきた日本では、中国の漢字の知識量が人の権威を裏付けるものとして機能し、漢字をよく知るものはそうではない他人を見下すことにつながったということ。
- ⑤ オトを表す文字のない言語社会では、被差別的な立場にある人に十分な教育の機会を与えないようにすることで、文字で表現する方法を奪い、彼らを社会的に抑圧する政策をとってきたということ。

問七 本文の内容と合致しているものはどれか。最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 独自にかな文字を持つ日本語は漢字を使用する言語文化でありながら、本質的にはアルファベットを使用する言語と同じ原理でなりたっている。
- ② 近代ヨーロッパの国々において、日常のことを話すのと同じくらい自然に書くための原理を求めたことが、音韻論の領域を発達させることにつながった。
- ③ ヨーロッパ言語は限られた数のオトでなりたっているため同数のアルファベットで書き表せるが、無限に増える漢字を用いる中国語ではオトも無限に増え続けることになる。
- ④ 独自の言語を持つためには、国家の独立と経済的、科学技術的發展が求められ、それができない場合は外国語を書き言葉として使用することに甘んじなければならない。
- ⑤ オトだけでなく意味をも同時に表現する漢字は、経済的發展とともに世界共通の表記文字としての地位をめぐってアルファベットと争うようになってきている。

問題二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

自分とは何か。この問いに対しては無限の答えがありうるであろう。1、自分は無限の属性を有しており、自分という主語には無限に述語づけが可能だからである。このように無限に述語づけが可能であるということは、自分を完全に定義することは不可能であるということである。そして、これら無限の述語の全体を一身に統一しているもの、それが自分なのである。それゆえ、自分とは何かという問いに唯一可能な答えがあるとすれば、それは「自分は自分である」という答えである。われわれは、このことを論理以前に、直観的に知っている。「自分は自分である」ということは、われわれにとつて最も直接的で確実な事実である。このように「自分は自分である」ということは直観的に疑いえないジメイの事実であるとしても、しかし、これは単なる同語反復にすぎず、それだけでは自分が何ら定義されたことにならない。

ところで、「自分は自分である」ということ、2、「自分は」と問い「自分である」と答える、その問いと答えとの間には無限の隔たりがある。それは、自分が無限の属性を有しているからということだけではなく、自分を自分たらしめているものについて無知ないし無意識であるからである。「自分は」と問い「自分である」と答えることの間には、自分にも知られないような無限の深淵²⁾がある。自分は自分の根底に無限の深淵を含んで自分としてある。自分は、そのような自分でも知られないような深淵から自分として現れ出ているのである。例えば深層心理学で言われる無意識はこの深淵の一つではあるが、より根本的なそれは、例えば次の達磨^{だるま}(中国に禅宗を伝えたインド人)の言葉の内に暗示されている。

昔、達磨は、梁の武帝に「朕^{ちん}に対する者は誰ぞ^た」(わしの目の前にいる者は誰か)と問われて、「不識」(知らぬ)と答えたと伝えられている。少なくともここで言うことは、達磨の答えは彼自身にも「不識」であるほど無限に深い根底からのそれであり、かつそれと同時に、その答えの内に彼自身がおのずから如実³⁾に現れ出ているということである。この問答は、自分の根底にはどこまでも自分を超えたものがあり、かつ、その自分を無限に超えたものが自分として明瞭に現れ出ていることを示している。

「自分は自分である」ということは、単なる同語反復ないし同一律ではなく、矛盾し合う二つの面を暗々裏に含んでいる。一つは、自分の根底には、自分を無限に超えた深み、自分ならざる所があるということ、つまり「自分は自分ではない」ということであり、もう一つは、自分はその自分ならざる所から自分として現れ出てきているということ、自分ならざるものが自分という形をとって現れているということ、つまり「自分は自分ならざる自分である」ということである。この二つの面は、自分という存在においてつねに切り離しがたく結びついている。両者は a のものである。それゆえ、さきの「自分は自分である」という表現を、この二つの面を含めて正確に言い直せば「自分は自分ではないが故に自分である」という表現になる。自分という存在はつねに、

あらゆる瞬間において〈自分ではないが故に自分である〉ものとして存在しているのである。

いま〈自分は自分ではないが故に自分である〉という抽象的な表現をしたが、これを前述の言葉で言い換えれば、〈自分ではない〉面は自分の宇宙性（普遍性）であり、〈自分である〉面は自分の唯一性（個別性）である。そして本来の自分、すなわち〈自分は自分ではないが故に自分である〉とは、この宇宙性（普遍性）と唯一性（個別性）という矛盾の止揚的統一である。^{*}

この三つの面のうち、本論では、〈自分は自分ではない〉という自分の宇宙性（普遍性）の面について述べるのであるが、まず、「自分」という言葉を分析することから始めたい。というのは、この言葉には自分の普遍性の面がよく表れていると思われるからである。

自分とは通常「私」のことである。「自分はこう思う」とは、「私はこう思う」ということである。しかし、時には、相手に向かって「自分はこう思うか」と尋ねることもある。この場合は「あなたはこう思うか」ということである。このように自分という言葉は、私に対しても相手に対しても用いられる。自分とは第一義的には私・自己と同義であるが、しかし、この私や自己という言葉は相手に対して用いることはできない（私を自己とすれば、相手は他己である）。自分という言葉だけが私にも相手にも用いられるのである。それはなぜであろうか。その理由は、自分という言葉には私と相手の両者に共通する何かが含まれていることにある。では、それは何であろうか。

自分の「自」という漢字は元来「鼻」の⁽⁴⁾シウウケイ文字であるとされる。自分の鼻から空気が出たり入ったりすることによって自分が生きている。空気という普遍的に存在するものを吸ったり吐いたりすることによって、自分という個別的存在が生きている。つまり、自分は空気という気を分有することによって生きている。このことは、私も相手も、つまり、それぞれの自分がそうである。私たちがしばしば、自分の鼻を指さして「この自分」と言うのは（眼や耳を指さして「自分」とは通常言わないであろう）、鼻を通して空気（気）を分有している自分を特定するためである。「気分がよい」とか「気分はいかがですか」と言うのも、それぞれの自分における気の分有の仕方について言われるのである。また日本語で「元気がある」とか「元気がない」と言われるが、「元気」とは本来宇宙の最も根元的な気を意味する言葉であった。眼に見えずして⁽⁵⁾パンブツを生かしている宇宙の根源の精気、それが「元気」である。「元気がある」とか「元気がない」ということも、この宇宙の根元の精気である「元気」の分有の程度について言われるのである。このように自分とは、宇宙に存在する気（元気とか空気）を分有しているそれぞれの存在を意味している。（イ）

しかし、自分という言葉は中国にはない日本独特の言葉であり、そこには漢字の意味とは異なった日本固有の意味合いも含まれている。自は訓読みでは「みずから」と「おのずから」の二通りに読まれる。日本語の「自分」という言葉にはこの二通りの意味、

すなわち「おのずから」(自然的)にして「みずから」(主体的)という意味が含まれているように思われる。「自然」とは、『老子』で「人は地に法^{のつと}り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る」と言われているように、天地のすべてを包む、ありのままの普遍的生命である。老子の理想は、一切のジンイ⁶を捨てて、この普遍的生命である「おのずから」なる自然に法って「みずから」が生きていることであつた。この「おのずから」なるままに「みずから」が生きていること、それが日本語で言う「自分」の本来のあり方である。人間以外のすべての自然物も「おのずから」生きているが、しかし、そのことを「みずから」(自覚して)生きているとは言えない。この「おのずから」と「みずから」の統一、それが日本語独特の「自分」という言葉の意味である。自分という言葉には、普遍的生命としての自然が本来すべての個人に分有されているということの直覚(たとえ無意識的であつても)が含まれているであろう。前述の氣の分有と同じように、自然という普遍的生命の分有、それがそれぞれの自分なのである。(ロ)

このことは自分を無限に超えたものが自分として現れ、自分の内に働いているということである。この自分を無限に超えたものを宇宙とよぶとすれば、自分の内には宇宙が働いていると言うことができる。外なる宇宙が大宇宙(マクロコスモス)であるのに対して、それぞれの自分は小宇宙(ミクロコスモス)である。しかも、それぞれの小宇宙の中には大宇宙が独自の仕方^cで宿され働いている。それぞれの小宇宙は大宇宙の二つとは異なる焦点である。このような小宇宙の独自性を個別性とよぶとすれば、その内に働いている大宇宙は普遍性である。本論の主題である〈自分は自分ではない―自分の普遍性〉とは、自分という小宇宙の内に働くこの大宇宙の側面を指している。(ハ)

ここで、「宇宙」という言葉の意味について簡単に述べておきたい。宇宙と言えば、私たちは普通、空間的な無限の広がりを感じて浮かべるであろう。3、宇宙とは本来、そのような空間的な意味だけではなく、時間的な意味をも含んでいた。中国前漢時代の思想書である『淮南子^{えなんじ}』には「往古来今、之を宙と謂^いい、四方上下、之を宇と謂う」と記されている。「四方上下」、つまり東西南北と天地という空間的世界が「宇」であり、「往古来今」、つまり過去から現在までの時間的世界が「宙」である。4、「宇宙」とは本来、空間と時間の全体を含む四次元的世界を意味していた。世界が単なる空間的世界であるとすれば、運動や変化というものはない。運動や変化があるということは、世界が時間的であるということである。例えば物質の移動は空間的であるが、そこには時間の経過がなければならない。空間の全体としての世界も絶えず時間的に変化している。それは空間の中に絶えず時間が浸入しているということである。(二)

それぞれの自分の内に宇宙が働いているということは、このような空間的・時間的な四次元的世界の全体が働いているということであり、自分という存在そのものが四次元的・宇宙的存在であるということである。そして、宇宙が動的であり、空間の中に絶えず時間が浸入していることは、自分という存在も動的であり、絶えず時間的に変化しているということである。それぞれ

の自分は宇宙の動的焦点なのである。

山田邦男『〈自分〉のありか』

(注) *止揚……アウフヘーベン(ドイツ語 Aufheben)。矛盾・対立する二つの概念を、その矛盾・対立を保ちながら、より高次の段階で統一すること。

問一 傍線部(1)～(6)のカタカナを漢字に改め、漢字は読みをひらがなで記しなさい。

問二 空欄 1 へ 4 に入る語としてそれぞれ最も適当なものを、次の中から選びなさい。ただし、同じものを複数回使ってはならない。

- ① それゆえ ② しかも ③ すなわち ④ なぜなら ⑤ しかし ⑥ あたかも

問三 本文からは次の一文が抜けている。元の場所に戻す場合、(イ)～(二)のどこに入るか。最も適当なものを、①～④の中から一つ選びなさい。

世界とは、このように空間的・時間的な四次元的世界であり、それが宇宙という言葉の本来の意味である。

- ① (イ) ② (ロ) ③ (ハ) ④ (ニ)

問四 空欄 a に入る語として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 離合集散 ② 一体不離 ③ 会者定離 ④ 愛別離苦 ⑤ 不即不離

問五 傍線部A「自分という言葉は、私に対しても相手に対しても用いられる」とあるが、それはなぜか。七十字以内で説明しなさい。ただし、句読点、記号も字数に含む。

問六 傍線部B「日本固有の意味合い」とはどのようなものか。最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 自然的な自分を受け入れず、主体的に生きるべきだという示唆を含んでいるもの。
- ② 人間の中にある主体性と、人間以外の自然物にある個別性の両方の要素をもつもの。
- ③ 漢字の「自」に、人間が主体的に呼吸することを表す「鼻」の意味を加えたもの。
- ④ 自然的な「おのずから」と主体的な「みずから」の二通りの意味を統一したもの。
- ⑤ 「私」や「自己」を表す「自分」と相手を表す「自分」の両方の意味をもつもの。

問七 傍線部C「それぞれの小宇宙の中には大宇宙が独自の仕方で宿され働いている」を説明したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 各個人の中の小宇宙に自分には見ることができない大宇宙が存在しており、その中で自分の唯一性が作られている。
- ② 各個人の無意識の中に宇宙の根元である気が存在しており、それぞれの気分のよさや元気の有無をつかさどっている。
- ③ 各個人の中に、自分を生かす宇宙の根元である気や空気があり、それぞれの自分に固有の方法や程度で存在している。
- ④ 各個人の中の小宇宙の根底にある大宇宙の大きさや動き方は、無意識のうちにそれぞれの主体性に影響を与えている。
- ⑤ 各個人の中に存在する自然性をあらわす大宇宙と、唯一性をあらわす小宇宙の配分の比率はそれぞれ異なっている。

問八 本文の内容と合致しているものはどれか。最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 自分という主語に対応する述語は限りなく存在しているため、自分の属性を明確に限定することは不可能である。
- ② 本来の自分とは、他者と共通の太宇宙の中に存在しており、相手と入れ替わることができる普遍的な存在である。
- ③ 自分を形作っているものは普遍的な自然界に存在しているため、自分の意志にかかわらず表に現れることがある。
- ④ 自分とは、三つの面、すなわち無限の無意識の面、空間的な大宇宙の面、時間的な小宇宙の面をもつ存在である。
- ⑤ 自分のことを言うときに鼻を指さすのは、鼻から吸う空気によって常に自分の主体性が保たれているからである。

